

巻頭言

本研究プロジェクトには、その前身がある。2010年3月、当時、神奈川大学経営学研究科博士前期課程に在学中の萩原富夫の呼びかけにより、経営学部の非常勤講師であった吉田隆、そして経営学部専任教員であった後藤伸の3名により、非公式の読書会を始めた。月一回開催、毎回報告者を決めて輪番で報告を行う、取り上げる著書は和洋を問わないが一冊丸ごと報告する、できるかぎり古典ないしそれに近い著作を取りあげる、などの原則のもとに読書会が始まった。この会は予定どおりほぼ毎月1回のペースで進み、取りあげた文献も多方面にわたったが、3名とも現代に連なる歴史研究に関心があったため、選択した本もおおのずと近代以降の著作が中心となった。近代社会の成立とはなにか、近代はこんにちに至るまでどのような影響を与えているのか、現代を特徴づける思考の枠組みはどのように形成されたのかといった共通の問題関心があることがわかり、ほぼ2年にわたる読書会を続けたあと、なんらかの研究成果にまとめていくことで合意が得られた。このため、2012年度からは、国際経営研究所のプロジェクトの一つとして申請し、幸いにも採択された。プロジェクト名は「近代社会の成立——社会の組織化をめぐる諸考察——」であり、申請の関係上、後藤がプロジェクト責任者となった。またこれにともなって、萩原、吉田両名は国際経営研究所の客員研究員となった。件の読書会はプロジェクトの研究会として継続したが、プロジェクト・ペーパーを刊行する関係上、近代に関する文献のやや系統だった選択がなされた。本冊子は、その研究成果の一端である。本書に収められているそれぞれの論文の内容を以下、簡単に紹介しておこう

後藤論文「近代社会における組織成立試論——工場における作業場内分業と協働の考察を中心に——」は、近代における組織、とくに「工場」の形成について考察した論文である。人びとが一箇所に集まり作業をおこなう場としての工場は、株式会社制度とともに近代に特有な制度といえるが、その成立根拠について工場成立期に生きた同時代人の説明を紹介しながら考察を加えている。具体的には、スミスならびにバベッジの作業場内分業を取りあげ

た。スミス分業論では、さまざまな作業の適切な分割と結合を行う主体はだれか、また分割した作業を結合する際になぜ作業者は工場という一箇所に集中する必要があるのか、という問題が明らかにされていなかった。バベッジは、スミス分業論では明らかではなかったこれら問題について、考察を一步進めた。すなわち、作業の分割と結合をおこなうのは製造主であること、また作業者の一箇所への集中の必要性については、こんにち取引費用経済学とよばれる学派が唱えるのと同じく似た理由、つまり市場取引に関わる費用とリスクの関係から組織内部の取引に置き換えることをもって、工場への作業者の集中を説いた。しかし、バベッジにあっても人々の協働活動の考察が欠落しており、これに続く考察では、協働活動をチーム生産に見いだす現代の諸説を紹介した。これらの検討の結果、組織成立および存続の根拠は、共通目的のために貢献意欲をもった人びとが集い、役割を分担したうえでコミュニケーションをとりながら作業する人びとの協働的活動にある、との結論を述べている。

萩原論文「近代を超える自得する経験：試論——二宮金次郎の丹精な生活作り——」は、人の経験とはどのように構成され、どのように人に働くものなのか、について考察した論文である。本論文の内容は、前半と後半に分かれ、前半では、近代との関わりで、人の経験はどのように構成されてきたかを現象学の視点から理解しようとした。それは、人の経験が現前する物事に対峙しながら存在論的に構成されていくと理解したからである。人間の意識作用は物事に対峙した時、志向性が働き、その作用によって経験が構成されると言われる。この志向作用は対象を選択的に表象化するため経験もその結果となり、われわれはそうした経験の上に思考し、行動している。そのことを考察している。後半では、こうして形成される経験から幕末期の大飢饉の最中、その復興に向かって生きた二宮金次郎の生活経験がどのように構成されたか、それをどのように想起することができるかを考えようとした。金次郎は幼少の頃から身近に酒匂川の氾濫という自然の猛威を幾度となく経験した。16歳で両親と死に別れ、生活の営み一切が直接的な実践的思考の対象となった。その体験は正に試行錯誤の連続であったに違いない。こうして現前する生活上の実践的な経験の積み重ねによって、金次郎固有の思想内容をも

つ「勤労・分度・推譲」という人間にとって普遍的な問題に行き着いた。その過程について考察を加えている。

吉田論文「ロカルノの信仰の亡命者について：再考」は、16世紀の宗教改革期において、スイス盟約者団（一二邦）の共同支配地であったロカルノ（現在イタリア語圏スイスのティチーノ州に位置する）から自己の信仰ゆえに故郷を棄ててチューリヒに「信仰の亡命者」として移住せざるを得なかった改革派のロカルノ人に関する論考である。彼らの亡命先での経済活動がチューリヒでの諸工業の発展のみならず、スイスの近代資本主義の興隆に果たした役割についての事例研究である。このチューリヒの事例からは、商工業活動を行った代表的なロカルノ人が、まず最初に小売商人・行商人のツunftであるサフランツunftに加入して、小規模な手工業から始めていることが理解される。彼らは同胞間の婚姻関係を通じて結束し、後ろ盾を得て、故郷の親類やイタリア語圏との交易関係を密にしながら事業を拡大している。やがて彼らは、それによって得た富を基礎にして都市政治の中核へと成り上がっていく。16世紀後半、特に対抗宗教改革期のチューリヒに亡命したロカルノ人は新しい経営システムすなわち問屋制と工場制そしてマニファクチャーを導入することでチューリヒの産業発展のみならずスイスの資本主義的發展にとっても多大な役割を果たしたことを多くの事例研究から導きだすことができるように思われる（吉田論文は神奈川大学国際経営研究所『国際経営フォーラム』No.25、2014に掲載された「ロカルノの信仰の亡命者について：再論」を一部修正補足のうえ本書に収録したことをお断りする）。

以上、3名の論考の概要を紹介した。今回のプロジェクト・ペーパーはわれわれの研究会の中間報告とさせていただきます。これらの論考が近代社会を再考するうえでどこまで有効な分析となっているかは、読者諸賢の判断に待つ以外にない。忌憚のないご意見・ご高評をいただければ幸いである。

「近代社会の成立」プロジェクトを代表して

後 藤 伸

2015年2月